

右舷灯

た。一眼レフカメラを構えているので、そう思ったらしい。「私も毎日夕陽を撮っているのよ」と言っている、スマホの画面を見せてくれた。その綺麗な写真とは対照的に足元の岸壁にはペットボトルが散乱して

いた。「最近、ごみ箱が減って、みんな捨てていくの」、「家庭でもごみの分別が面倒で、汚れたペットボトルは洗って出さなくてはいらないのでたいへん」と話が続いた。ペットボトルなどのプラスチックゴミは分別してリサイクルに、というのが今の常識になっている。そして収

れたプラスチックは、便利な容

集されたプラスチックは再生されるが、それにはエネルギーも人手も必要で、日本では採算に乘らず、その多くが海外に輸出されてきたが、海外でも採算がとりにくくなり、さらに環境汚染を引き起こすため輸入が規制され始めている。

プラゴミのリサイクルの工つが他のゴミと一緒に燃やすサー

発想の転換

器として使われた後で燃料としての役割を果たすことになる。冒頭の女性に「汚れたまま燃えるゴミとして出せば、容器も汚れも燃料になるので後ろめたいいことはないですよ」と言うことを丸くしていた。

プラゴミも貴重なエネルギー資源と考えると拾いたくならないだろうか。プラゴミのエネルギー量は、キログラム当たり灯油やガソリンとほぼ同じだという。使いまわして最後に燃料として活用することには理にかなっている。専門家ではプラゴミは都市油田と呼ばれているが、ごみ箱に「エネルギー回収箱」、ペットボトルに「飲み終わったらエネルギー資源」と表示するなど、身近な言い方で普及を図ると、海洋プラスチックゴミ削減につながるよ

(池田良穂)